

【実施報告】

第 25 回オンラインセミナー

「デンマークの教育と日本の教育のこれから」

第 25 回目のセミナーでは、デンマークのロラン島に在住、文化翻訳家としてご活躍されているニールセン北村朋子氏をお迎えした。セミナーでは、デンマークの教育についてご解説いただくとともに、デンマークの教育の優れている点やデンマークからみる日本の教育の疑問点を通じて、これからの日本の教育についてご示唆いただいた。

セミナーの主な内容について、以下のとおり報告する。

1 概要

- 日 時：2023 年 3 月 1 日（水）18 時 00 分から 19 時 15 分まで（日本時間）
- 当日参加者数：128 名（申込者数：317 名）
- プログラム：①開会挨拶・講師紹介 (18:00～18:05)
- ②講演 (18:05～18:50)
- ③質疑応答 (18:50～19:15)

2 講演内容

<導入>

デンマークの人口は約 585 万人であるところ、一人当たりの GDP は世界 9 位であり、人口は少ないが一人当たりの生産性が高い。その他、世界幸福度ランキング 2 位、腐敗認識指数ランキング 1 位など、各種ランキングでも上位に位置している。

デンマークでは教育について、子供や若者に必要なのは、早すぎる教育介入や英才教育ではなく、子ども時代や若者時代にしかできない自尊心をはぐくむバラエティに富んだ経験を重ねることだと考えられている。

<デンマークの教育の概要>

デンマークにおける教育について、まずは 2 歳 10 か月から日本の幼稚園と保育園が合わさったような施設に 3 年間程度通い、その後、0～9 年生までの 10 年間の義務教育が始まる。なお、0 年生は幼稚園から学校に移行するための準備期間であり、これも義務教育に含まれている。

9 年生の後は、エフタスコレという 10 年生にあたる制度を 7 割ぐらいの生徒が活用している。デンマークの高等学校は専門性が高い教育を提供しており、9 年生終了時点の 15～16 歳の年齢で自分自身の専門性を決めることが難しい場合等にこの制度を活用する。高等学校には 2～3 年間在籍することになり、普通高校、ビジネスに関する分野やエンジニアリングを専門とする学校、職業専門教育学校がある。

高等学校卒業後、大学入学までに、大部分の生徒はギャップイヤーを活用し、アルバイトや、自身が取り組みたいと考えていた社会問題に取り組む時間を過ごしている。また、大学を卒業した後もギャップイヤーを活用し、自分が本当にしたい仕事は何かを考える期間を設ける場合が多い。

<幼稚園・保育園>

デンマークでは、自治体が域内の働ける人にはみんなに働いてもらって、税金を納めてもらいたいと考えていることもあり、希望するこども全員が保育園に入れないといけないとされている。

近年、一日中森や自然の中で過ごす森の幼稚園や自然幼稚園が人気になっており、デンマーク国内で 700 箇所ほど存在している。近隣諸国も自然幼稚園に注目し、各種研究が進められており、自然の中で多くの時間を過ごすことで集中力や運動能力が高まるなどの長所が発表されている。自然幼稚園においても、文化教育等のカリキュラムは存在するものの、こどもの主体性が尊重されており、何をして遊ぶか、けんかが発生した場合にどのように対応するかも子供たちが自分たちで決定している。

<義務教育 小学校～中学校>

義務教育であるフォルケスコレ（0～9）年生の特徴としては、基本的に校則がないこと、7年生まで成績表もなく試験もほとんどないことである。また、学校の予算配分を、小中学校の生徒会、親の組織と学校、自治体組織の3者がフラットな関係性で予算を決定しているのも特徴的である。各学校の予算配分を決定する際に、学校の生徒会が他の学校を訪問し、どの学校に予算を配分すべきかを検討するような機会も存在している。

フォルケスコレでは民主主義が非常に重要視されており、民主主義に関する教育として、選挙が実施される際には中学生による模擬選挙が実施されている。模擬選挙の結果は選挙に影響しないが、選挙の候補者を実際に学校に呼んで討論会を実施したうえで、実際の投票と同様のシステムで投票し、その結果が集計され、大人の投票結果と比較されてその差異について議論している。なお、高等学校においては、授業の一環として全学年の生徒とその親を対象とした討論会が開催される。高校生には選挙の有権者もかなりの割合で含まれており、デンマークは18歳で被選挙権もあるので、選挙が非常に身近なものとして取り扱われている。

<エフタスコレ>

現在、高校を卒業した生徒の半数以上が10年生の制度を活用しており、そのうちの約半分がエフタスコレという全寮制の学校を選択している。ここでは、自分が興味のある科目を中心に学習に取り組むことができるという特徴がある。また、育ってきた地域の関係性から切り離された全寮制の学校に入学することで、なりたい自分に近づく機会を得ることができ、出身地から離れることでこれまで過ごしてきた人間関係がない場所で、新しい自分になる機会となっている。

エフタスコレでは、夜間に4-5人のグループの生徒が、目隠しをした状態で先生に学校から車で20～40分の場所に連れていかれ、グループで協力して学校まで歩い

て帰るといった特徴的なイベントが開催されているところもある。可能な限り携帯電話の地図を使用せず、12時間程度かけて学校に戻るような経験を通じて、不測の事態が発生した際に、仲間たちと一緒にどう乗り越えて目標を達成するかを学習する機会となっている。

<社会人の教育、フォルケホイスコーレ>

デンマークでは社会人になっても教育を受けることが尊重されている。こどもは最新の教育を受けているが、大人は歳を重ねるにつれて自分が受けた教育から遠ざかっていく。よって、こどもたちが受けている最新の教育とのギャップを埋めるため、大人こそ教育を受けることが大切だと考えられている。多くの企業において、従業員の学びが尊重されており、必ずしも職業に関わるものでなくとも、企業もそれを支援している。それは、人が学びたいという権利を誰も侵害することはできないという考え方や、学びたいことを学んだ人は人間としても厚みを得ることに繋がり、それが社会に良い影響を与えると考えられているためである。教育した社員が退職してしまうこともあるが、どの企業でも社員教育に力を入れていれば、他の組織で教育を受けた人材が労働市場に加わるため、社員教育に力を入れることは社会にとってのメリットだとされている。

フォルケホイスコーレでは資格が得られるわけではないが、17.5歳以上であればだれでも入学可能であり、全寮制の学校で自由に自分の好きなことを探求するための時間として、また、人生の中で立ち止って自分と社会をよりよく知る時間として、非常に支持されている。

フォルケスコーレが始まったのは1844年であるが、その設立背景には、戦争に伴い国家財政が破綻したことを受け、国際社会で存在感を示す国になるためには、国民一人一人の民度を上げ、民主主義において重要である、議論をすることができる国民を増やすことが必要だと考えられたところにある。

現在、フォルケホイスコーレは70校程度存在しており、今もなお民主主義の根幹となる教育を担っていると認識されている。

<デンマークの教育が優れている点>

- ・こどもがこどもでいられる時間や、若者が若者でいられる時間が最大限尊重されており、大人の都合でその貴重な時間を搾取しない教育と社会の仕組みがあること
- ・学びや仕事が順位や成績至上主義でないこと
- ・各個人の得意な点を伸ばすことが重要視されていること
- ・国の目指す方向性と教育内容が一致していること、などが挙げられる。

<日本の教育で疑問に思うこと>

- ・校則、試験、制服は何のためにあるのか

- ・国がこども全員に教育を施す義務に基づいて学校があるのに、なぜそだけで学びが完結せず、塾などに頼らなければならないのか
- ・人生についてじっくり考える時間、誰からも評価されずに自由に考えて実践できる時間が人生の中で必要ではないか
- ・日本/各自治体は、国民/市民にとって、世界にとって、どんな国/地域でありたいと考えているのか
- ・なぜ先生も学生も日本人もこんなに忙しいのか、などが挙げられる。

<まとめ>

多様な考え方の人が存在する中、誰一人排除せず、最善の妥協点を探ることが民主主義であり、民主主義と教育は強く結びついている。

デンマークでは、物事の仕組みが変わって定着するには20年かかるとされており、自分たちが大人になったとき、自分や自分の子供たちが幸せで暮らしやすい社会がそこにあるか、ないなら何をすることが必要かを考えるために学校に通っていると教えられている。そこで大事になるのが批判的分析である。自分が取る一つ一つの行動がこれからの民主主義をつくることに繋がり、また、自分が生きている社会なのだから、そのルールを決める/変えるのは自分であると考えることが大切。

デンマークでは、常に自分たちが「どんな国でありたいか」が国民と共有されており、そのうえで「何が必要か」を見極め、必要なことを「教育で実践」できているように感じる。一方、日本ではどんな国でありたいかという議論が長らくされていないように感じるため、国/地域が改めてそれを考えることが必要ではないか。

3 質疑応答

Q デンマークにおける教育は日本と大きく異なるが、デンマークの教育を日本に導入することはできるか。

A 可能だと考えている。私は今後20年で、学校でこどもたちがしたいことをできるように、日本の教育を変えたいと考えている。

Q 自治体は教育にどのように関わっているか

A 基礎自治体が幼稚園及び小中学校を管轄しており、高等学校以降は国の管轄となっている。学校で何をどのように教えるかは自治体、学校、教員に任されており、地域に根差した教育も重要視されている。また、生徒が選択したテーマについて掘り下げて学習することもあり、同じ学校の同じ学年でも、学ぶ内容が異なる場合がある。高校や大学入試がないため、自由な教育が達成されている。卒業試験と高等学校内の成績に基づくポイントによって入学する大学とその学部を選択することになる。生徒全員が平均的に学ぶとは考えられておらず、それぞれが自分の得意な分野を活かし、希望する大学の学部に必要なポイントを得るように努力している。

入試は、こどもが多かった時代に子供を振り分けるための制度だと考える。日本において出生数が減少している今、こどもにランク付けをすることのメリットは少

ないのではないかと。子どもたちを尊重し、個々人の長所を活かす社会の仕組みを構築することが重要である。

Q 不登校の生徒への支援はどのようになっているか

A 学校の柔軟性が高いため、不登校の生徒はあまり発生していないと思われる。例えば、学校に行く意味を見出せない子どもが、自身の興味関心や強みを活かすために学校に行かずに自動車ディーラーに通い、自動車に関する知識を伸ばすようなケースもある。そこで実際の仕事に近い現場を経験することで、学校で学ぶ数学などの科目が仕事で必要であることを体感することになり、少しずつ学校に戻って授業を受けるようになったとのことである。その子は ADHD の兆候もあり、午前は通常授業、午後は ADHD や発達障害の兆候がある子どもたち向けの授業に参加しているようである。子どもがどのように授業に参加するかを、本人、親、学校、社会で考えているため、家に引きこもって過ごすことはあまり想像できない。

Q 放課後の子供の過ごしかた、クラブ活動について伺いたい

A 学校に紐づいたクラブ活動は存在しない。小学校 4 年生くらいまでの子供は、学校に併設されている学童クラブに通う。概ね 5 年生以上はヤングクラブという、もう少し成熟した子どもを対象とする施設に通っている。運動や音楽のクラブも、学校とは切り離されて運営されている。デンマークでは、1 年生から教科担任制が導入されていること、4 年生まではペタゴという人間教育を担当する職員がいること、会議が非常に少ないことから、教員がそれぞれの業務に注力できる仕組みになっている。

Q 「できないとしたらそれはなぜだろう？ どうしたらできるだろう？」とお話があったが、日本では、社会にはニーズがあるはずなのに、それに気づくことができていないケースがあるように思われるが、どのようにその状況を打破すればよいか。

A 当たり前を疑えることが大事。日本では前例主義が強いと感じるが、移り変わる世の中では前例にこだわりすぎるのは良くない。デンマークでは、「同じところにとどまっていることはありえないから、自分たちが学び続けて変わり続けたいといけない」と考えており、そのため、当たり前を疑い続けている。